

令和3年度 第5回ニセコ町観光審議会 議事録

1 日 時

令和4年(2021年)2月9日(火) 14:00~16:30

2 場 所

オンライン開催

3 出席者

委 員 下田委員(会長)、高久委員、岩崎委員、高井委員、大橋委員、桑添委員、スコット委員、石黒委員、若杉委員

ニセコ町 商工観光課 斉藤課長、高橋参事、谷井係長 (オブザーバー: 青木参事)

小樽商科大学 後藤准教授、大湊

4 内 容

(1) 下田会長挨拶

最終回である今回は、コロナの影響で残念ながらオンライン開催となったが、ここまでの議論がまとまってきたので、活発な意見交換をお願いしたい。

(2) 議題

① ニセコ町観光ビジョンについて(商工観光課・高橋)

これまで4回の審議会を開催し議論を重ねる中で、皆さんからの意見をうけ、観光振興ビジョン案(概要版、本編)に取りまとめた。前回の観光振興計画の策定から10年が経過し、観光を取り巻く状況が大きく変わっている。特に国がインバウンド政策を進める中で、直近だとコロナの影響等もあり、観光地としてリスクマネジメントをどうするのかとか、観光自体、日本全体でも大きなターニングポイントを迎えている。今回策定するビジョンは、今後、観光のスタンダードとなる国際的な持続可能な観光の基準(GSTC-D)や観光庁「日本版持続可能な観光ガイドライン」に沿ったものを作ろうとしているところである。

ビジョン策定の目的は、町民、それから町内の事業者、観光協会、役場等が共有の認識を持ち、今後の目指すべき観光地の将来像、あるいは次世代を見据えた観光地域作りの方向性を示す計画策定である。前回の計画が2018年で切れているので、少し遡るが2019年度から10年間の計画というのが、今回の計画期間となる。ニセコ町の観光入込客数はコロナ直前まで継続して伸びており2019年度は過去最高の175万人に達したが、翌年の2020年度に関しては前期比46.4%の落ち込みとなった。外国人観光客の入込客数に関しては2017年度の21.8万人が過去最高の数値であり、過去10年間で5.4倍に膨らんでいた。

次に、ニセコ町における観光の課題を、5つに整理している。1つ目は、観光事業の季節変動である。ニセコ町をよく知らない人は、「冬は観光客数が多いが、夏は少ない」と思っている人も多いが、むしろ1999年度以降は夏の入込客数が多かった。ただし宿泊客数で見ると、オンシーズンとオフシーズンでは大きな開きがあり、そのため宿泊施設等では従業員の通年雇用が限定的で、季節雇用の従業員も多く、サービス水準が上がらないことが課題となっている。具体的

に宿泊客数が少ない時期は、4月、11月、加えて5月、6月もワースト4に入っている。この底になっている時期の宿泊施設の稼働率をどのように上げていくかが大きな課題と考えている。2つ目は、経済波及効果の向上である。ニセコ町の観光客1人当たりの消費額は国内の観光地に比べて高い。これにはいくつか理由があって、高級な施設が多いということもあるが、それだけではなく長期滞在者がいることも消費単価を押し上げている。一方で、観光客がニセコ町で使ったお金が地域にどのくらい循環しているかも重要だ。例えば、ホテルが食材を町内で調達したり、町内の方を雇用したりすると、観光客が使ったお金が町内でグルグル循環する。しかし、様々な食材、材料や雇用に関しては町内だけで賄えないため、観光消費は町外に流出しているという結果がRESASを使った調査で明らかになっている。いかに町内での調達率を上げ、地域の観光経済波及効果の最大化を図ることが必要である。3つ目は、二次交通（域内交通）の機能強化である。2030年度に北海道新幹線の延伸、高速道路の延伸によりニセコエリアへの交通アクセスが劇的に変化する。隣町である倶知安町に新幹線の新駅ができることで札幌までの所要時間が30分に短縮すると言われており、それに伴い観光客の増加も見込まれるが、一方でニセコ町内に泊らずに、日帰りしてしまうというネガティブな側面も考えられる。ここでは、観光客が公共交通機関を利用してニセコエリアに来た際にどのように移動するのか、あるいはホテルから食事やアクティビティへの移動をどうするのか、という二次交通（域内交通）強化に焦点を当てている。4つ目は、国際的な競争力の向上である。北海道内はもとより、国内や海外の観光地と地域間競争の激化、互いに観光客を奪い合っている関係性の中で、他地域といかに差別化を図り、競争力を高めるかが課題となっている。海外ではサステイナブルツーリズムに取り組まない地域は10年後には淘汰されるというショッキングなレポートが出されている。日本国内ではまだ持続可能な観光というムーブメントは始まったばかりのため、いち早く持続可能な観光地へとシフトする必要がある。5つ目は、町民の観光に対するコミットメントである。理解と参画という言葉を使っているが、観光は裾野の広い産業であり、3つ目の課題にあるとおりニセコ町内で観光客が支払ったお金は直接的あるいは間接的に町民の生活や収入に影響を与えている。観光経済波及効果の「見える化」も大事だが、町民の観光に対する一層の理解を図り、地域の魅力を町民自身が知り、参画し、楽しむことが求められる。ニセコ町の現状把握の意味でSWOTという手法で分析したのも記載しているので、後ほどご覧いただければと思う。

ここまで説明した観光の課題を踏まえて、ニセコ町が目指すべき将来像として「観光客や町民から、信頼される国際リゾート」と最終決定ではないが仮置きした。ニセコ町の観光は、パウダースノーが代表するように、日本一の清流と言われた尻別川や地域ならではの地形など自然に支えられている部分が多い。これらの自然資源は、何もせず未来永劫続くというものではないため、観光に携わる事業者だけではなく町民も含めて、次世代に繋ぐ責任があるということをも明記したいと考えている。持続可能な観光の基本的な考え方だが、社会経済、文化、環境、この3つの持続性を保ちながら海外・国内の観光客だけでなく、町民からも信頼を集めるような国際リゾートとして町民の暮らしと調和した観光地を目指すというような表現にしている。

「観光客や町民から、信頼される国際リゾート」という将来像に向かい、10年後どのような地域になってほしいのか、目指すべき地域の姿として3つに整理をした。1つ目が、成熟した通年型の国際リゾート、2つ目が、高品質・高付加価値のリゾート、3つ目が、町民が誇れるリゾートである。詳しい内容は本編を見て欲しい。

次に、将来像の実現に向けた基本戦略を3つ掲げた。1つ目、成熟した通年型の国際リゾートへの基本戦略は、観光産業の安定的な経済活動と地域貢献としている。施策の方向性としては、季節変動の平準化と雇用の安定、観光事業における域内調達率の向上、観光事業者の地域コミュニティへの貢献と整理している。2つ目、高品質高付加価値のリゾートへの基本戦略は、観光

客の多様な価値観への対応と受入環境の整備としている。施策としては、観光客に特別な観光体験の提供、観光客・町民の地域資源（自然・文化・歴史）への理解促進、安全で快適に観光できる受入環境の整備と整理している。3つ目、町民が誇れるリゾートに対応する戦略は、観光によって町民の生活の質を高めるとしている。施策の方向性としては、観光客の環境配慮型行動の喚起、地域の魅力や観光の取組の情報発信（町内へのインナーブランディング等も含む）、観光関連の起業を増やし、自然・文化等の継承に寄与と整理している。

今回、目指すべき将来像だけではなく、それらを実現するための数値目標の設定にも取り組む。直近の数値がコロナ禍の影響が大きいと、2019年度を基準年とし、その10年後、目指すべき観光地のあり方を示すような数値が何かを決め、その数値達成に向けて取組を進めていく。数値には一連のストーリーを持たせている。まずは延べ宿泊者数だが、2019年度に47.3万人だったものを2028年度には80万人を目指すことにしている。これは、観光客が多い冬シーズンの宿泊客を増やす意味ではなく、閑散期の底上げ、特に4月、5月、6月、11月の底上げを図る狙いがある。また1.42泊となっている1人当たりの宿泊日数を2泊に伸ばしたい。それらを計算して80万人という数字を算出している。延べ宿泊者数が伸びると連動して消費単価、観光消費額も上がってくると考えている。観光消費額の計算方法は、日帰り客の1人当たり消費額1万329円に、2019年度日帰り客数141万人を掛けた数値、また宿泊客の消費単価が7万8000円、これに宿泊客数33万人を掛けた数値、これを合算して407億円という数値となる。この算定手法にて2028年度の数値を計算すると530億円となり、これを目標値としている。また、この観光による経済波及効果を生み出し、町民が生活の豊かさを実感できる割合と観光客の満足度も上げる、一方で、観光に起因する環境負荷低減を実現できるよう環境負荷の数値も下げる（または維持する）というものだ。

このようなビジョンを誰がどのような形で推進していくのか、つまり持続可能な観光地をどのようにマネジメントするのかについては、その中核的な役割を担う組織としてニセコリゾート観光協会を位置づけ、組織の機能強化を図る。数値目標のモニタリング、進捗管理（PDCA）については、ニセコ町の観光審議会ですべてと定期的に評価・見直しをしていきたいと考えている。推進自体は観光事業者だけではなく、町民とも連携しながら、官民一帯となって観光振興ビジョンを推し進めていきたい。

また、先ほど将来像のところで「観光客や町民から、信頼される国際リゾート」というワードをおいたが、役場内でももう少し磨きたいという要望があり、審議会メンバーからいくつかキーワードなどもらえたら大変有難い。追加資料に6案ほど記載している他に、持続可能な観光に取り組む他地域はどんな言葉で将来像を表現しているかを取りまとめた。観光フォーラムにも登壇した釜石市は、震災後に観光を使いながら地域を復興させていく思いがあるため、「観光を通じて、住まう誇りを取り戻す」としている。京都市は長文に全てを盛り込んでいるので参考に見ていただき、金沢市は観光ビジョンを最近作り直し「市民と旅行者が共感を深め、『ほんもの』を未来へと紡いでいくまち」としている。沖縄県は、「世界水準の観光リゾート地」としている。海外の事例も共有する。英語訳に関しては解釈の違いもあるかもしれないが、ニュージーランドは「サステナブルな成長がニュージーランドを豊かにする」、ノルウェーは意識になるが「感動は大きく、環境への負荷は小さく」という意味だ。ハワイは文章形式になっているが、ハワイらしい内容と持続可能というところを言及しており、ウィーンでは持続可能な観光をかなり明確に出しており、「生活の質、場所の質、経験の質」と表現している。考える参考として欲しい。

今回が観光ビジョンに関する審議の最終回のため、皆さんの意見を本編・概要版へ反映させながら、最終案を取りまとめて、2月下旬には、パブリックコメント（町民の皆さんからの意見

募集)を行う予定である。皆さんから意見をいただく最後のチャンスとなるため、忌憚のない意見をいただけたらと思う。

(3) 意見交換

① ニセコ町観光振興ビジョン(資料2)概要版(資料1)について質疑応答

〈後藤准教授〉

質問が2つある。1つ目は、将来像のところで「観光客や町民から、信頼される国際リゾート」という表記に合わせて、目指す地域の姿を3つ設定しているが、1つ目のみ「国際リゾート」とし、2つ目と3つ目に国際を付けずに「リゾート」という表現にしているのは、何か意味を持たせているのか。質問の2点目は、KPIの基準年を2019年度として10年後となれば、現在からだと6年後のKPIとなるが、それで良いのか。

〈高橋参事〉

実は、当初は観光地という言葉で表現していたが、町長と意見交換する中で、ニセコは観光地ではなくリゾートという言葉で統一しようとなったが国際が抜けていた。国際リゾートで統一したい。またKPIの年度に関して、そもそもビジョンの計画期間が2028年度までということになっているため、期間は短いのだがその範囲内で設定している。

〈若杉委員〉

資料の冒頭部分の書きぶりだが、国際基準あるいは国が定めた基準に合わせて作成というより、結果的に準じたとすることが大事で、町民目線で作った、町民目線を優先したと表記した方が、ニセコ町の観光振興ビジョンになりやすいのではないかと。GSTC-Dに合わせて作成という行政的な野心を感じさせるよりは良いのでは、と感じた。

次にKPIで気になったのは、そもそも付加価値あるいはサービスの品質向上を訴えておきながら、消費単価は上げない、消費単価の目標がそのままなのはなぜか。リピート率が高くなくても初回訪問の観光客の方が実は単価が高い、だからこそリピート率のKPIを下げる、という説明だとしても、消費単価の見直しは入れるべきではと思った。

また課題に関する部分で、域内経済、観光で得た収入よりも域外に流出している金額が大きければ観光収支の赤字になっているわけで、これはすぐ解消しなければいけないことだと思う。商工会とかあるいは観光協会が中心になったとしても地域課題を解決する場所、つまり、地域商社のようなものを始めて、流通など域内の中で解決できるようにしていくことで循環型、域内経済が回る状態となり、持続可能な観光地になるのではないかと。域内経済を高めていくということで、農家の方とか商店の方とかを含めて、人材も揃えながら、そこで経済効果の域外流出を防ぐことを課題としてより明確に掲げる必要があるのではないかと。

もう一つ、通年型リゾートと強調するのは大事だと思う一方、平準化という表現は前向きに感じなかった。つまり、夏も冬もそれぞれの価値を上げていく、それに合わせてコストコントロールをどうするかはマネジメントの問題なので、平準化したとしてもそれだけで雇用が安定するとは思わない。稼げる時に最大限稼ぐことも重要な戦略だと思う。

〈高橋参事〉

町民目線というのはとても良い表現なので、目的などの部分で盛り込みたい。KPIに関して、当初はかなり消費単価を上げる案を作成し、観光課内や町長、副町長を含めて議論していたが、単価をどんどん上げていくという認識ではなく、(単価の低い時期の宿泊客数を増やすため)少

し下げめに「維持する」としている。ただ内容として、高品質・高付加価値ということを挙げているので、単価と品質とを合わせていく、という書きぶりにできればと思う。あと、観光消費の域外の流出という点に関しては、おっしゃるように地域商社という部分まで書き込めれば一番良いが、議論がそこまでできていない。地域商社という表現は出来ないかもしれないが、域内経済を高めるという意味で商工会や様々な関係者と一緒に進めていくとしたい。

最後の平準化について、当初「稼ぐ」という言葉をかなり文面に入れていたが、役場内で調整する中で「稼ぐ」の表記を前面に押し出すのはどうかという話もあったので、稼ぐという言葉をあえて使わず、域内調達率を上げるとした。地域でのコストコントロール、マネジメントの話をもう少し記載できたらと思う。

〈若杉委員〉

稼ぐということは、イコール損しないということ。収入を得ていく努力をせず、域外に流出させるのであれば、地域に利益が生まれず。利益を元に町民と一緒に新しい何かを作ること、あるいは利益の町民還元など出来るわけがない。稼ぐという表現が役場の中で否定的な理由、意見を聞かせて欲しい。

〈高橋参事〉

色々な考え方があると思うが、経済的に着実に稼ぐことは大事だという認識は同じだ。ただ表現の問題、言葉の好き嫌いだと思っている。稼ぐ、稼ぐと言わない方がニセコらしいのではという意見もあった。

〈若杉委員〉

色々な意見があるのは分かるが、稼ぐことをもっと強調してもいいと思う。調達など域内で全て解決して域外流出を止める、それが結果として豊かなまち作りに繋がると思う。稼ぐことを目的にするとニセコらしくないということは、表現のバランスの問題だと思うが、重要な部分でもあるので、あまりそこを避けないようにして欲しい。

〈高橋参事〉

考え方がもう少し伝わるような表現は大事だと思っているので、域外流出を止めて、それがニセコ町民の暮らしを豊かにするということを表現したい。

〈後藤准教授〉

内容的には、観光経済効果の最大化などの表現が入ってはいるが、もう少し具体的に記載すべきだと理解した。概要版は圧縮されたものなので難しいが、本編では可能な限りそういった表現を追加できるよう考えてもらう形でどうか。

〈高橋参事〉

本編は、まだ文章を盛り込むことが可能なので、表現を含め磨いていく。

〈石黒委員〉

KPI のところが気になった。前回の審議会でも発言した通り、パフォーマンスの結果として出てくるものと、外部環境が関係する部分を分けた方が良いと思う。例えば、消費額やリピーター率は国の指標では KPI の主な例として出されるが、果たしてこのニセコ町の施策の中でどこま

でパフォーマンスに関与できるかという、かなり難しいのではないかと思います。この辺は KGI、外部性も含めてゴールとしてこのような指標になったら良いものと、実際にニセコ町としての施策の結果、出てきてもらわないと困るパフォーマンスの結果を、明確に分けた方が良いでしょう。

例えば、目指すべき地域の姿の中にある、魅力的な職場として若者から選ばれる観光産業には対応する KPI が無い。これは住民意識調査で出てきている指標なので目指すべき。結果として人口が増える、就業者が増える、地域の先ほど議論になっていた給与として払う先の方が町民かそうでないかというのとは大事な指標だと思うので、それがパフォーマンスなのかゴールなのか。ゴールとパフォーマンスの結果を明確に分けて設定しないと、先ほど説明いただいたストーリーも総論ではそれらしく聞こえつつも、これに基づいて来年の事業として何をやるか議論した際、何かしら整合性がとれなくなる懸念があると感じた。

〈後藤准教授〉

先月の観光フォーラムでも KPI の測定可能性が出た。ニセコ町らしい KPI をどう設けていくかというところで、色々葛藤しながらニセコ町としてまとめられたと思う。

〈高橋参事〉

KPI と KGI については指摘の通り重々承知しているが、就業者の割合、就労先として選ばれているかという指標を入れたいと考えているが、モニタリングする数値の調査自体に予算とマンパワーを避けられない可能性があり、苦渋の選択で今あるものを基準にして作成している。

〈石黒委員〉

季節変動もそもそも是非があるが、ピークとボトムの違いをどれだけ詰めるかという点も重要ではないか。需要の平準化は国際的にも大きな政策課題になっており、ピークシーズンとローシーズンの差や、主要都市とその他の地域との差を圧縮するというのを KGI に掲げている事例も国外にはある。参考にされてみてはどうか。

〈高橋参事〉

ピークとボトムの差も計算はしている。概要版ではなく、本編でどういう数値を計算しているかの説明を記載したい。

〈スコット委員〉

概要版を読み、説明を受けた印象として、課題を受けて目標ができたことは理解できたが、では具体的に何をやるのかが見えてこないなと思った。このままパブリックコメントに出されると、見た方は「それで、ここからどうするの」と思うのではと感じた。もう少し細かいところを詰めて、具体的に各項目でどういう行動をとっていくのか、数年間の中でどういう行動をとり、結果としてこうなるなど、そういった部分の説明を強調されてはどうか。

〈後藤准教授〉

ビジョンとアクションプランに関する質問だと思うが、アクションプランをどこまで盛り込むかということだと思う。

〈高橋参事〉

いただいた指摘はその通りだと思う。観光ビジョンとか観光振興計画をどのレベル感で書く

かという問題だと考えている。ビジョンや計画でも、それはいつまでに誰がやるか、来年度の予算とどれを紐付けるか、いう部分まで徹底的に書き込む観光計画もある。自治体にもよるが、今回、ニセコ町の観光振興ビジョンでは、持続可能に大きな方向転換を図る位置づけであり、なかなかそこまで決めきれないところもある。基本的な考え方や目線合わせ的な部分までしか書き込めていないと認識している。

〈スコット委員〉

それであれば、その現状を踏まえて、説明の中に現時点での状態と、将来的により一層具体的に詰めていくという表記も盛り込んだ方が、町民にとって明快だと思う。

〈高橋参事〉

冒頭で、どこまでを書き込んでいる計画か、どういう意味合いの計画かを加筆したい。ご指摘のように最後まで読んだけど、具体性が無いという感想を避けたい。表現を調整する。

〈高久委員〉

自分自身も観光事業に携わる中で、例えば海外から時間とお金を使って来てくれること、日々の暮らしがある私達のところに、喜んでまた来るよって言ってもらえると非常に嬉しいが、一方で海外に本社を置き、ニセコ町でビジネスをしながら得た収入は海外に流出している、そもそもタックスフリーでニセコの中に税金が落とされていない、雇用も海外人材という観光関連企業も散見される。こうした苦しい時期を乗り越えてきたニセコ町の企業があるからこそ今があるわけで、国内企業およびニセコ町内そして後志管内に本拠地を置くような会社と各外国企業の具体的な差別化などを実施しないと、観光によって町民生活の質を高めることは結果的に結びつかないのでは無いかと感じた。またコロナ禍で苦しい時期にきてくれる日本人観光客が税負担をするのみで、そもそも外国人観光客の税負担がないこともおかしいのではと個人的には思う。

〈後藤准教授〉

宿泊税に関しては、本編最後に入っていたと思う。外国人観光客に対して、要は町の税金を使っている整備をしていく中で、彼らが税負担をしていないことに対してもう少し政策を打っていくというような話だったと理解した。もう一つは外国籍企業の税金について、メリットを享受しながらその負担が適切に行われていない側面があるということだと思う。

〈高橋参事〉

タックスフリーの話は町でなんとかするのは難しいが、観光振興において、町内に拠点を置いている事業者さんかどうかで区別している。支援や補助をする場合、対象は必ずニセコ町内の事業者か、町内で実績がある会社かということが要件になる。

〈高久委員〉

苦しい時に来てくれている観光客、そして営業している企業、働く人材、こういった人たちはやはり次に繋げていく上でも大事な人達であり、そういった企業や人、そんな働き手も含めて町内の各企業に手厚い何かがあるということは重要だと思う。また、海外だとインドネシア、ハワイ等でよくあるが、現地価格と観光客価格が別に設定されている、そういったことも重視してほしいと思う。日本人割、道民割ではないが、免許証提示でこの価格、一方、観光客に対して表に

出す値段はこれ、など現実的な打ち手かと考える。

〈高橋参事〉

すべてに答えられるわけではないが、厳しい中でも経営努力を重ねる企業、今来てくれる観光客は本当に貴重だと思っている。そこを大事にすることが前提ということも含めて、地域の暮らし、地域で働いている人たちが幸せになれることが大事だと思う。

〈スコット委員〉

観光経済波及効果の向上のところで、「材料や雇用等は町内だけでは賄えないため、そこで材料や雇用等の町内調達率を引き上げ、観光経済効果の最大化を図ることが重要」と書いてあるが、特に冬は、ニセコ町で全て賄うというのはほぼ無理に近い。雇用は町内の方をできるだけ雇うことはできると思う。原料とか材料とかを、なぜ他地域から取っているのか。例えば町内の農家はオーガニック野菜を育てているとして、そもそも作っている量が少ない。となると、どうしてもオーガニックで作っている農家から取りたい、サステナブルなあり方を飲食店として継続しようと思うとニセコ町には少ないから別地域から取らざるを得ない。なぜ、別地域から取っているかをもう少し掘り下げた方が町内の調達率を最終的に引き上げることになると思う。

〈高橋参事〉

域内調達率が低い理由は理解している。例えばホテルのシーツなどリネンクリーニング一つとっても、全て町内に発注なんて無理だ。一方で高橋牧場さんのように、チョコレートの原料をフェアトレードで他地域から運んでくる事例もある。単純に、町内のものであったら良いという話ではないと理解している。基本戦略の最後、「観光関連の起業を増やす」というのは、お話しいただいたように、例えばオーガニックの野菜が欲しいと考える店舗が今後増えたとき、それを提供できる農家が増えるなどをイメージしている。観光関連の起業が増えていく、結果調達率が上がっていくという関係だ。色々な観光にまつわるサービス、観光事業者へのサプライヤーとか提供しているものはたくさんあるが、そういった部分も今後手厚くなっていけばいいなと思っている。無理なものを、今後全て町内で調達する、ということはこの小さな町で受け止めきれない。ただ雇用側では逆に、町内で循環可能だと理解した上で進めていくことが大事だと認識している。全部町内のものを使えば良いという誤解を招く可能性があるというふうに認識したので、例示を入れるなど本編の中で表記したい。

〈後藤准教授〉

概要のところを見るとこの最後の一文に、材料・雇用の町内調達率の引き上げとはっきり書かれている。人口 5000 人規模の町ゆえに、そもそも町内調達が難しいということが明確であれば、町民の方が疑問を感じないような表現を追加して、うまくまとめて欲しい。

② ニセコ町観光振興ビジョンにおける将来像について

〈後藤准教授〉

将来像を「観光客や町民から、信頼される国際リゾート」と設定しているが、ここについてももう少し磨いてほうが良いという意見があったので、候補案や他地域のワードなどを踏まえて皆さんから意見やアイデアを募りたい。

〈高久委員〉

町民の生活の質を高めるとか、町民が誇れるリゾート、など非常に素晴らしいなと思うので、ここから先のアクションプランや具体的行動の部分で深めていければ良いと思う。

〈岩崎委員〉

審議会で印象的に残っているのが、下田会長が初回の挨拶で言っていた、住んでよし、というフレーズである。本日の意見交換を聞いていても「町民あってこそ」は大事なワードであり、それが結果的に信頼される国際リゾートに結びつくのだろうなと思った。

キャッチコピーではなく概要についてだが、ニセコの強みの中で、パウダースノーなど雪のことや、清流日本一の尻別川のことなど自然に関する中で、ぜひ温泉も加えて欲しい。当たり前にあるものだけど、ニセコの魅力だと思う。

〈高橋参事〉

温泉は大事に考えているが、例えば泉質が多様だとか追加出来るワードがあるなと気づいた。昆布温泉はその歴史はニセコ観光の成り立ちとしても非常に重要なポジションと理解している。温泉について資源のところでもう少し手厚く記載していきたい。

〈後藤准教授〉

泉質の多さ、宿泊施設もコンドミニアムとか画一的なものではなく、和風から洋風なもの、和洋折衷なホテルまで、多様な宿泊施設がペンション含めて、町内に多数あることもニセコ町の特徴だと思う。温泉がある宿泊施設が多く、温泉巡りも可能など補足説明して欲しい。

〈高井委員〉

私たちはニセコに住み、観光業を営んでいる。観光客はニセコが好きだからこそ、ニセコに魅力を感じるからこそ来るのだと考えたとき、やはり自分自身もニセコを愛しているし、来てくれる観光客も愛しているからこそ、それが継続される町、「愛され続ける町」というのがいいなと思った。

あとは、後世に繋ぐとか、ニセコらしさを守り続ける、等いろいろ自分の中でもあったが、誰にでもわかりやすいワードとして「愛され続ける町」というのを案として出したい。

〈大橋委員〉

「観光客や町民から、信頼される国際リゾート」の案で、概ね良いと思う。ただし、ニセコ町の方はニセコ町を愛しているので、「町民にも観光客にも」のように、先に町民という言葉が来ると自分事の一つとして捉えられるので良いと感じた。加えて、ニセコ町はパウダースノー以外にも四季を通じて魅力がある街なので、「四季」とか「自然」とか、そういった言葉が入ってくると素敵なキャッチコピーになるのではないかな。

ニセコ町に来て思うのは、ニセコ町の魅力を外から来た方が教えてくれることが多い。地元にいると、その魅力が当たり前になってしまうが、町外の方はニセコ町の魅力を知っているので、町外の方の会話や感じている魅力にアンテナを張りながら、これからもニセコ町の何か良さを自分なりに伝えていきたい。

〈高橋参事〉

「町民」を先に出すのはすごくいい点だと思うので、全ページ検証したい。

〈桑添委員〉

キャッチフレーズとして「ニセコで唯一なリゾート」を考えた。これまでは外部からの評価によってニセコ町の良さに気づかされる、押し上げられてきたものもあると思うが、これからはニセコ町に住む方々の内部の声をもっと言語化したい、もっとそれを価値にしたい。外部の価値観と内部の方の価値観が合致したものがあからこそ、ニセコで味わえる唯一というものが、色々な人に伝わる場所になったらいいなと思った。

あとは、今回のコロナ禍でも感じたが、観光は衣・食・住・医療、全て揃った上でかなうものだと思うので、今回の概要に加えて「農業と防災」という骨子が追加されていると、もっとビジョンとして魅力的になると思う。

〈高橋参事〉

全部は難しいかもしれないが、参考にさせて欲しい。

〈スコット委員〉

将来像で言うと、問題があり、解決するものがあって目標があるということだと思うので、その目標を将来像に掲げた方が良いと思う。既存案の「観光客や町民から、信頼される国際リゾート」も間違っていない。

またニセコはユニークなリゾート地だと思う。元々はスキーと温泉だったが、マウンテンバイク、ニセコクラシック、ハイキング、トレイルランニングなど様々なアクティビティができる場所なので、日本の中でもユニークな場所だと思う。観光の歴史から見ても、古くから日本の方が愛してきた土地で、且つ海外から注目を浴びて愛されているリゾートだと思うので、非常にユニークな場所だと思う。

目指すべき地域の姿に「高品質・高付加価値のリゾート」とあるが、質が大きいと思う。観光の質、町民の生活の質が向上すれば、結果的に信頼される、観光客や町民から信頼されるリゾートになると思う。何かの質を将来像に掲げるのも大事だと思う。

〈若杉委員〉

観光フォーラムでニセコ高校の発表にあった、町民よし・観光客よし・働く人よし・未来よし
がニセコの次世代を担う人たちのメッセージとしてすごくよかったと思う。これに加えて要素としては、「いつもよし」を加えた、五つの良しはどうか。将来像の中で、信頼されるというのは結果なので、今まで観光事業者と行政が中心になって進めてきた観光地域作りを、観光客つまり顧客と住民によって作り出していくのだという言葉は、持続可能なまち作り、観光地作りを目指すには良い将来像だと思う。信頼されるという状態を、できれば一緒に「作り出す」という動きを加えた言葉も良い。つまり住民と観光客で作るっていうのが一つのキーワードとなる。

もう一つは、ニセコはどのような市場の中で競争力を高めるかと考えると、世界的なリゾートの中で唯一性とかユニークさとか本物さを出そうとした場合、国際という言葉よりはむしろ「世界」という言葉の方が町民の人たちはわかりやすいかと思う。

それからリゾートと括ってしまうと、観光地あるいはそのエリアだけのような気がして、町民の共感を得られないかもしれない。ニセコ町という町のフレーズとして考えると、例えば「リゾートタウン」と言えないだろうか。ニセコ町のまち作りの将来像に焦点を当てる意味は、このリゾートタウンを作り出す、ニセコ町住民と観光客で作る、そして世界を代表するモデルになるようなリゾートタウンにするということだと思う。

〈高橋参事〉

ロジカルかつ的確なご指摘でありがたい。全部繋げると長い文章になるので、うまくまとめたい。観光地とか観光地域みたいな表現をしがちだが、それも違うのではという声ももらっていた。リゾートかと言われると、若杉委員がおっしゃるようにスキー場エリアの方だけみたいなイメージを持たれたりしても困るので、地域全体、町全体でというようなニュアンスなんかも入れられないか、検討したい。

〈石黒委員〉

この限られた標語というか将来像にどこまでのレベル感のものを盛り込むかっていうところが一つ議論としてはある。地球環境とか自然環境みたいなものが議論の最初にはあって、やっぱりそのためには住民の皆さんが大事という流れになったと思う。現時点では、住民が表に出ているが、再度問うとすると地球環境みたいなものは想起させなくていいのか。

地域も住民も観光客も地球もみたいにするとうどんどん長い文章になってしまう。なんか、あなたも私も地球も愛する、のように主体を変えて展開していくか、あるいは今とか未来とか時間軸にするかというどちらかが良いと思う。

あと、日本人は愛されるとか、信頼される、など受動態が好きな傾向があり、海外の標語はどちらかと言えば能動体を使う。ニセコが愛されるわけだが、そのためには誰が愛するのか、という部分では「世界のリゾート」の標語として、「愛する」という表現は良いと感じた。

〈下田委員〉

非常に参考になる熱い思いも感じられる意見があった。将来像、結局どういう地域にしたいかを感じられる言葉が良いと思いながら聞いていた。ビジョンを定めたところで、誰が見るの、誰が聞くのという部分もあるとは思いますが、これまでのキャンペーンのキャッチフレーズだと、小さな世界都市、環境モデル都市、また観光圏で定めたものだと、ニセコマイエクストリーム、世界が選ぶニセコ、など色々あるが、何年間ぐらいをこのキャッチフレーズでいくのか、将来像という結構長い目で見たものもいいのかなという、いろいろな思いがある。そんな中で、自分の案としては「住む人、来る人、スマイルニセコ町」を提出する。

〈後藤准教授〉

これで全ての委員から意見をいただいた。過去の議論も踏まえて、私からキャッチフレーズのところを話したい。経営戦略の策定でよく使うのが、誰に何をどのように、という部分である。誰にというところが今皆さんに議論いただいた、事業者だとか町民だとか、観光客だとかこういったものが誰にという部分になる。

あとやはり環境とか自然という議論を踏まえていうと、サステナブル、今までのキャッチフレーズもこのフレーズは入ってなかったようなので、サステナブルな成長っていうのがまたキーワードになると感じた。また山岳ディスティネーションという案、マウンテンリゾート、またはマウンテンリゾートタウンという表現になるのかもしれないが、こういったところがキーワードとして出てくるかなと感じた。

〈高橋参事〉

いただいた様々なアイデアをもとに、最終案を絞り下田会長とすり合わせを実施したい。一人一人に意見を聞いていくと、多分何周しても結論は出ないと思われるので、そんな形でまとめにさせていただきたい。

③ 審議会最終回の挨拶

〈後藤准教授〉

今回の審議会が5回目で最後のため、皆さんから感想など一言ずついただきたい。

〈若杉委員〉

審議会のメンバーとしていろいろ勉強させていただいた。ニセコのことをもっと好きになれたと感謝している。もっと農家の方のことを考えたいと思っている。旅の目的に食は欠かせないからこそ、町内でレストランや食など、見せ方でアピールできるようなものなど振興策とビジョンの議論では足りなかったというような気がする。ビジョンと、アクションプランは次にどのようなステップになるかということも書き込んで進めてもらえると良いと思った。また、解説もあるが、専門用語が多くわからない言葉もあると思うので、素人の方に1回見ていただいた方がいいと考える。例えば、「旅ナカ」「旅マエ」などの用語は、インバウンドマーケティングをやっている人以外はわからないと思う。渾身の将来像を期待している。

〈高久委員〉

全出席が出来ず申し訳ない、皆さんの知見や頑張ってきた人たちと未来のニセコ観光を想像しながら話す時間を設けられたこと、自分のこれからの生活にも活かすことが出来ると感じている。10年後に向けて、今回決めたことが現実になることがある程度予想できるというか、そういうのも感じ、非常に楽しみである。既存の農業や工業、既存の仕事がニセコにはあるので、うまく連携して、観光だけではない、でも観光の注目度は高い、観光以外のところと連携して、理解を深めていけると、良い計画になるのかなと感じている。

〈岩崎委員〉

毎度委員の皆さんや先生のニセコ町に対する熱い想いを聞き、とても勉強になった。さらなるニセコ観光の発展に尽力できればと思っている。

〈高井委員〉

私もニセコに戻ってきて18年くらい経つが、今が一番厳しい状況だと思っている。その中でこういった観光ビジョンに携われたこと、ビジョンを作れたこと、そういう目標があること、皆さんと繋がれたことによって、また前向きに進んでいけるかなと思うので、今回は本当にありがたい機会をいただいた。

春にはきっと落ち着くことを信じて、また前向きにニセコの観光に携わっていったらいいなということ、逆に言うとコロナがあったことによっていろいろな部分も見直せたとし、2019年の忙しい状態がずっと続いていたのでは思いつかなかったこともたくさんあったので、そういう意味では前向きにこれから進んでいけたらと思う。

〈大橋委員〉

会議を通してサステナブルに注目して、観光事業全体で取組んでいくことが大事だというのは前から感じていたことなので、自分の思いと一致していて嬉しく思ったのと、やはりニセコ町民として、外から見ていたニセコだったのが最近少しずつニセコ町民の気持ちになってきている自分があるので、そのバランスを何か大事にしなが、来た頃の気持ちも持ちながら、ニセコ町民として何かいろんなことをやっていけたらと思う。

〈桑添委員〉

先ほどと重なるが、農業の視点をもう少し入れたかった思いがある。今後こういう機会があったとき、農業と防災という視点は入れてほしいと思う。自分は東日本大震災で被災したので、ニセコ町のいいところは地震が少ないところだと思うし、災害に強いまちだと思うが、災害に遭ったことのない人はそこに気づいてないというのは思っていて、災害が起きたとき、気づいたときにはもう遅い。このようなビジョンとか未来とかっていうときには必ずこれから先、防災っていうのをに入れてほしいなと思っている。

〈スコット委員〉

自分の勝手なイメージで言い方が悪いが、こういったビジョンを決めました、中身空っぽで、みたいなのが他の町政策として多い気がする。なので、ニセコ町はやっぱりそうではなくて中身がある、さすがニセコ町と言われるような、住んでいる者としてもそうだし、事業をやっている者としても、さすがニセコ町と言われるような、中身の伴うものを作っていかれたらいいなと思っている。今回はビジョンの策定で携わったが、今後そういった町の政策として何か具体的に精度を高めていけるようなことがあれば、より一層ワクワクするなと思った。

〈石黒委員〉

夜の会議なのにその日に皆さんと飲食の機会を持てなかったことが心残りだが、来年度以降そういう機会もあるのかなと楽しみにしている。

北海道あるいは世界のニセコってところでこういう住民の皆さんの議論があったということはすごく価値があることで、そこに居合わせる機会をいただいたということも本当に感謝している。

〈下田委員〉

今年度策定に携わっているメンバーが、多様性に富んでいてすごく雰囲気の良い会議だっという印象をずっと持っていた。

公募委員の若杉委員、中川委員も違った視点で大変勉強になった。今回策定するビジョンは今年度末で決定するが、これはスタートでありきっかけの一つとして、やはり最後は我々住民や観光に携わる事業者が、多様な立場で、定期的に会って話し合うっていうだけでもすごく意味のあることだと感じたので、今後ともいろんな場面でニセコの観光のことについて話し合う場面を持続していければ良いと思う。

〈後藤准教授〉

この手の審議会や委員会では、他人ごとのように話される方が多い印象がある。町に意見をやるかのような発言が散見されることが多いのだが、今回の審議会は全くそういうことはなくて、自分ごと、当事者意識として町の課題を捉えており、町に何かこれをやってほしいという要望だけではなくて、自分も協力しますよっていう気持ちが常に現れた審議会だったことが、非常に印象に残った。

下田会長からも雰囲気が良かったという話があったが、まさに皆さんのニセコ愛が感じられる審議会だったなというふうに思っている。ありがとうございました。

以上